

『春泥集』と『ヴェルジエ』

—— 帝塚山派文学への帝塚山学院の貢献 ——

鶴 崎 裕 雄

はじめに

まず冒頭にお断りしておきたいのは、本稿で扱う帝塚山派文学の作家や詩人の名前は総て敬称を省略したことである。論文での敬称省略は当然のことであるが、帝塚山学院を卒業し、永年そこに勤めた私にとつて、たとえば庄野英二先生は中学生としては恩師であり、高校・大学の教師としては校長・学長という上司であった。長沖一先生も高校生としては恩師であり、短期大学では学長として上司であった。杉山平一先生も中学時代から親しくしていただいた尊敬すべき先生である。「先生」抜きでは筆は進みにくい^①が、敢えて敬称は省略した。

平成二十七年（二〇一五）十一月一日、帝塚山派文学学会が発足した^①。これは平成二十五年五月、帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校開校三〇周年記念事業の一つに、木津川計氏を講師として招いた記念講演があつて、その

席上、木津川氏は、昭和二〇年代以降、大阪市内の帝塚山に居住する作家たちにより、新しい傾向の文学、小説や詩歌が誕生したことを指摘し、「帝塚山派文学」の名称で一括することができると述べた。その新しい傾向とは、気品の良さがあり、知性的な内容で、物質的にも経済的にも恵まれた環境によって育まれたものである。

実はこの傾向については、昭和の終わり頃、一九八〇年代、帝塚山学院の大学や短期大学の研究室で、気の置けない杉山平一たちと話していたのであるが、気品の良さとか、知性的、恵まれた環境などといった言葉は我々自身の形容になってしまうので、気恥ずかしくて「正面切つてはいえないなあ」と話していたものである^②。

ところが木津川氏の講演を機会に改めて、帝塚山界隈に居住した小説家や詩人たちに正面切つて取り組んでも良いのではないかと思うようになった。まず対象となる作家や詩人たち、藤澤桓夫や長沖一、石濱恒夫、庄野英二・潤三兄弟、阪田寛夫、杉山平一はみな鬼籍の人になってしまった。また時代が激しく変動した。特に昭和から平成への移行期、高級住宅地として知られていた帝塚山界隈の変化は大きい。昭和の初期、大企業の社長の邸宅が、高名な料亭となり、さらに瀟洒なマンションとなった。確かに瀟洒なマンションではあるが、大邸宅ではない。

加えて「帝塚山派文学学会」の作家や詩人たちと因縁が深い帝塚山学院が平成二十八年に創立一〇〇周年を迎え、A4判七七六頁からなる大部な『帝塚山学院一〇〇年史』^③を刊行した。この編集・刊行も「帝塚山派文学」研究の道を拓くことになったと思う。まずは契機となった木津川氏の講演に感謝申し上げたい。木津川氏は「帝塚山派文学」研究の背中を暖かく押してくれたのである。

一 『春泥集』という冊子

神奈川県庄野潤三郎に『春泥集』という冊子が長らく保存されてきた。和綴本の冊子で、その冊子に寄書きをした七人は、まさに帝塚山派文学の作家たちであり、詩人たちであった。冊子の体裁は、縦20・3cm、横13・3cm、全25丁、和紙の袋綴本で、各丁に10行の罫線が印刷されている。表紙は薄黄色の和紙で、左端の題簽に毛筆で「春泥集 桓夫題」とある。藤澤桓夫の自筆である。以下に各丁の寄書きを画像で示すが、これは初公開であり、その公開については庄野家の了解を得ている。



『春泥集』表紙



(2丁裏・3丁表の見開)

春泥の
燈影叩く
雨となり

桓夫



(4丁裏・5丁表の見開)

ウキリアム
サロウヤン
我と遊べや
春の夜

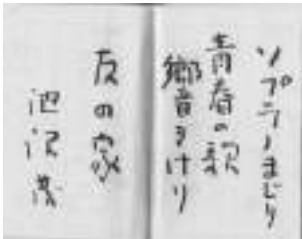
潤三



(3丁裏・4丁表の見開)

春雨の
襖にならび
あねいもと

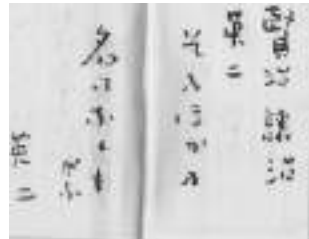
長沖一



(6丁裏・7丁表の見開)

ソプラノまじり
青春の歌
響きけり
友の家

池沢茂



(5丁裏・6丁表の見開)

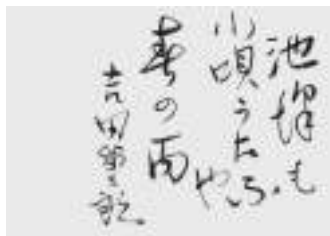
賢治 讓治
英二
そのほかの
名はななくも
がな

英二



(8丁裏・9丁表の見開)

わが酒杯に
ひとひらの
花瓣を浮べたまへ
ああ 風
風ではためなのです
あなたの繊く白い指からでは
なくては
私? 私はボードレール
石濱恒夫



(7丁裏・8丁表の見開)

池澤も
小唄うたふや
春の雨
吉田留三郎



(12丁裏・13丁表の見開)

僕の好きな
春の花
連翹
辛夷
デンドロビウム
桓夫



(9丁裏・10丁表の見開)

昭和二十三年三月二十二日
竹林の七賢ならねど七人の
高士帝塚山萬代池のほとり
なる庄野潤三が館に会し
高樓に倚り酒を啖ひ放歌
高吟すこの日朝来春雨
都塵を洗ひ池畔の楊柳
青色新にして詩興醉
心とともに頓に展くを覚ゆ
古人も云へり春宵一刻價千
金と即ち歓会の次第を小記
すること依如件と云爾
藤澤桓夫
(10丁裏・12丁表寄書きなし)



(15丁裏・16丁表の見開)

酔った若い良人は
小さなアコデオンを
奏ひていた。
美しい小鳥のように
奥さんはだまって
ほほえんでいた
外には春雨が
降っている

長沖 一



(13丁裏・14丁表の見開)

花野ゆき花を
見ざりき
ほそぼそと
緒土道の
つづけるばかり

石濱恒夫

(14丁裏・15丁表寄書きなし)



(20丁裏)

春の夜のスパート
パイのかなしさは
酔ひどれ人の歌
の盡きぬこと
いついかな世代も
時もあるべしや
男子は飲めば
酔うぞたのしき

桓

一



(16丁裏・17丁表の見開)

友ら去りにし
この部屋に
サントリイウキスキイト
スパートパイと
そして
酔ひて狐狐なる
われと

潤三

(17丁裏・20丁表寄書きなし)

註、狐ハ獨ノ意ナリ



(21丁裏・22丁表の見開)

しとしと語る

春の雨

嘆きや

われは告げねども

明日は

戦争始まると

友らがうたふ

花の歌

潤三

(22丁裏〜25丁表寄書きなし)

二 万代池と『春泥集』成立の昭和二十三年三月二十二日

藤澤桓夫が書くように、『春泥集』は、昭和二十三年三月二十二日、庄野潤三の自宅に「竹林の七賢」ならぬ七人の高士が集まり、酒を飲み、食事をし、気炎をあげた産物である。この時、潤三の家は帝塚山東三丁目、万代池にほど近い、まさに「万代池のほとり」にあつて、同じ並びの二軒南には父親の庄野貞一の家があつた。つまり潤三自身が育つた家の二軒隣であつた。

この頃、藤澤は朝日新聞に小説『私は見た』を連載していた。



(最後の25丁裏、すぐに裏表紙の見返)

色よりも

花よりも

そして酒よりも

英二

これ以前に、万代池は大改修が行われていた。万代池公園内の東北域に建つ「整地記念碑」（住吉大社権禰直小出英詞氏調査）には次のようにある。

（正面碑文）

本整理地区ハ元大阪府東成郡住吉村ニ属スル農業地ナリシガ 大正十四年大阪府域ニ編入セラレ 住吉区住吉町ト改称セラル 全地ハ元来地味概ネ肥沃ナレドモ 耕地ノ区画錯雜シテ灌溉運輸ノ便ニ乏シク 為ニ耕作上ノ不利ヲ忍ブコト久シ 村当局此ニ鑑ミル所アリ 耕地ノ一大整理ヲ断行シテ 以テ産業ノ発達ヲ図ラムト数次関係地主ト協議ヲ遂ゲ 明治四十五年六月先ヅ住吉第一 次イデ大正十四年四月住吉第一及ビ住吉第二ノ各耕地整理組合ヲ創設ス 爾来苦心経営事業着々トシテ進ミ 住吉第一ハ大正三年十月 住吉第二ハ昭和十六年二月 夫々之ガ完成ヲ告ゲ 其ノ整理地区ノ広域三十六万二千百十二坪 即チ一・一二平方畧道路延長二五・二畧 水路延長八・八畧ニ達ス 当地区ハ其ノ後都市膨張ノ趨勢ニ伴ヒテ殆ンド住宅地ト化シ 今ヤ全ク其ノ旧觀ヲ改ムルニ至レリ

本事業開始以來 関係当局ノ労苦洵ニ多大ナルモノアルヲ認ム 茲ニ記念碑ヲ建設スルノ挙アリ 余ニ撰文ヲ需ム 仍チ当地開發由来ヲ叙シ 以テ囑ニ応スルコト爾リ

昭和十六年四月廿六日

大阪府知事從三位勲二等 三邊長治撰

寧楽史邑 辻本勝巳書

（背面碑文）

住吉第二耕地整理組合建之

万代池の改修工事はこの「耕地記念碑」建立の前後に行われたのである。その改修工事以前、万代池周辺の道は雨が降ると泥濘ぬかるんで、跳ね回る豆粒ほどの黒い蛙が群がっていた。庄野英二の『帝塚山風物誌』¹の「万代池」に描かれている通りであった。その冒頭と末尾の部分を用用する。

いまとちがって私の子供のころの万代池には風趣があった。いまは大阪市の公園となって、桜も植えられ周囲は平坦になっているが、昔はスキの生い茂った起伏の多い土堤どてで、草のなかに細い径みちがあった。

お月見になるとみんなスキをとりに行った。私の小学校の二年生か三年生のころ、ある日、先生につれて池の周囲の土堤を歩いてきた。散歩かメダカの観察か、なにかそんなことで一列になって歩いてきた。草のなかの径は一列でないと歩けなかった。土堤は起伏が多くて冒険にみちていた。(中略)水草に花が咲いてイトトンボがとまっていた。ラッポやベニもいっぱい集まってくるし、コイ、フナ、メダカ、ドジョウ、モロコのほか、ナマズもカメもいた。カメは池のほとりにあがって散歩をするし、大雨が降ると、万代池のドジョウが道にあふれて私の家の前まで流れてきた。

ところが今日の万代池にはぜんぜん魅力がない。私は散歩にいくともしない。しかし私の子供たちは万代池へエビガニや魚をとりについて日の暮れるのを忘れている。

『春泥集』が書かれた昭和二十三年は太平洋戦争の終戦三年後である。アスファルトで舗装されている道などは珍しい時代であった。さすがに庄野順三の家の前をドジョウや豆粒ほどの黒い蛙が泳ぎ回り、飛び跳ねることはなかったろうが、大雨の日は道は泥沼のようであった。日本中、普段に見られる光景であった。

『春泥集』が書かれた昭和二十三年三月二十二日の大阪の天気気象庁の「過去の気象データ検索」によって

大阪 1948年3月(日ごとの値) 主要要素

日	降水量 (mm)			気温 (℃)		
	合計	最大		平均	最高	最低
		1時間	10分間			
1	0.0	0.0	0.0	3.1	6.2	0.2
2	0.0	0.0	0.0	2.6	7.5	-0.6
3	—	—	—	3.1	11.2	-3.5
4	—	0.0	0.0	5.5	12.3	-2.2
5	0.0	—	—	5.4	11.3	1.0
6	2.9	1.4	0.5	3.9	8.0	-1.4
7	2.1	0.3	0.2	5.5	8.8	4.6
8	—	—	—	3.4	8.3	-0.6
9	—	—	—	4.1	10.7	-2.6
10	0.3	0.3	0.1	6.1	12.6	-0.9
11	0.1	0.1	0.1	8.6	11.5	6.3
12	—	—	—	13.3	19.6	8.3
13	15.8	6.9	1.3	14.1	17.7	10.0
14	20.9	8.0	2.6	8.2	10.4	5.1
15	—	—	—	6.9	10.3	2.7
16	1.1	0.9	0.2	9.0	15.1	5.1
17	26.5	2.5	×	6.0	7.5	4.9
18	2.4	0.5	×	7.4	12.2	3.4
19	—	—	—	9.4	17.9	0.9
20	1.0	0.9	×	13.2	17.3	10.4
21	40.8	10.1	1.7	10.6	12.6	8.5
22	6.5	1.6	0.4	8.3	10.4	6.6
23	5.8	0.6	0.2	7.5	10.9	4.6
24	0.0	0.0	0.0	5.5	12.1	1.2
25	—	—	—	3.1	8.3	-0.3
26	—	—	—	3.7	8.8	-2.1
27	—	—	—	6.1	13.4	-1.8
28	—	—	—	9.0	15.0	2.2
29	—	—	—	9.2	17.3	4.1
30	—	—	—	8.2	15.4	0.5
31	—	—	—	10.6	19.5	1.6

調べてみると、右の表のように、前日の二十一日は降水量四〇・八mm、二十二日当日は六・五mm。まさに春泥の日。その日は、私が中学生として帝塚山学院の通学を再開する半月ほど前のことであった。

三 『春泥集』成立までの戦後の日本

昭和二十年八月十五日、日本は太平洋戦争に敗北し、終戦を迎えた。この日を境にわが国の政治も経済も大打撃を受け、大きく変動した。困難の道を歩み出したのである。勿論、戦時中も経済的に苦しく、出征兵士は外地で、子供たちは疎開先で困難な生活を余儀なくされた。然し終戦は、それまでの価値観、生活の信条を払拭しなければならぬほどの変化をもたらした。そうした中で、出征していた帝塚山派文学の作家や詩人たちはほつほつ帰国⁽⁵⁾し、わが家へ帰ることができた。帝塚山派の作家や詩人たちを語る時、背景となる終戦後のわが国の政治・経済を眺めておきたい。以下、主な歴史的事柄を帝塚山学院の歩みとともに、簡単な年表にまとめる。

昭和20年（以下、アラビア数字は月・日）

- 8・15 終戦。正午、玉音放送。太平洋戦争終結。
- 8・17 東久邇宮稔彦内閣成立。
- 8・28 連合国最高司令官ダグラス・マッカーサー、厚木飛行場到着。
- 9・11 戦争犯罪人逮捕命令。東條英機元陸軍大臣、自殺未遂。
- 9・25 大阪駐留アメリカ軍先発隊、和歌浦上陸。
- 9・27 昭和天皇、マッカーサーを訪問。アメリカ軍第一軍団第九八師団二万人、大阪進駐。
- 10・5 帝塚山学院校舎にも駐留（それまで帝塚山学院にいた日本軍と交代）。
- 10・9 幣原喜重郎内閣成立。外相に吉田茂就任。

- 11・6 GHQ（連合国日本占領軍司令部）、財閥解体を政府に勧告。
- 12・9 GHQ、「農地改革についての覚書」によって農地改革を指令。
- 12・16 近衛文麿元内閣総理大臣服毒自殺。

昭和21年

- 1・1 天皇、人間宣言。
- 1・4 軍国主義者、公職追放。
- 2・17 新円発行、幣値切り下げ。
- 2・19 昭和天皇、神奈川県を初め、各地巡幸。
- 3・5 米国教育使節団来日、教育の民主化促進。
- 3・31 「教育基本法」「学校教育法」公布。
- 4・10 新選挙法による衆議院総選挙。
- 5・3 帝塚山学院、保護者・卒業生対象に「女子自由大学」開設。
- 5・22 第一次吉田茂内閣成立。
- 11・3 日本国憲法公布。

昭和22年

- 1・31 GHQ、2・1ゼネラルストライキ中止命令。
- 4・1 新学制による小学校・中学校発足。
- 4・25 衆議院選挙。社会党145人、自由党131人、国民協同党31人当選。
- 5・3 日本国憲法施行。

- 6・1 社会党片山哲内閣成立。
 - 7・4 経済白書発表。副題に「財政も企業も家計も赤字」。
 - 7・5 ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」放送開始。
 - 11・2 帝塚山学院創立三〇周年式典挙行。
 - 11・29 帝塚山学院文化総合雑誌『ヴェルジェ』創刊号発行。
- 昭和23年

- 3・10 芦田均内閣成立。
- 3・22 庄野潤三宅にて『春泥集』成立。
- 4・1 新制高等学校発足。

(付録年表 帝塚山派文学学会設立関係)
平成23年

5・7～6・4 大阪狭山市公民館成人大学講座「帝塚山学院ゆかりの作家」開催。

平成25年

- 5・11 帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校開校三〇周年式典で木津川計氏が記念講演。

平成27年

- 11・1 帝塚山派文学学会設立総会。

平成28年

- 1・1 『大阪春秋』第一六一号発行、「帝塚山モダンイズム」を特集。

3・31 『帝塚山学院一〇〇年史』刊行。

5・8 帝塚山学院創立一〇〇周年記念式典挙行。招待者に『帝塚山学院一〇〇年史』贈呈。

右の年表中、(付録年表 帝塚山派文学学会設立関係)について補足する。

平成二十三年の成人大学講座「帝塚山学院ゆかりの作家」は、大阪狭山市立公民館と帝塚山学院大学共催で行った、帝塚山学院ゆかりの五人の作家たちについての講演である。

作家と講演者は次の通りである。

庄野英二 帝塚山学院大学教授 彭佳紅氏

庄野潤三 プール学院大学教授 西尾宣明氏

杉山平一 帝塚山学院大学教授 梅本宣之氏

長沖 一 帝塚山学院大学名誉教授 鶴崎裕雄

阪田寛夫 梅花女子大学名誉教授 谷悦子氏

平成二十八年一月に発行された『大阪春秋』新年号は「帝塚山モダニズム」特集で、八木孝昌氏の「帝塚山学院の創立と庄野貞一 の教育理念」⁶⁾は、さすが『一〇〇年史』編纂の中心にあっただけに、学院の創立と今日までの経緯を簡単明瞭に著述している。「帝塚山学院文学学会設立記念講演会・設立総会開催報告」⁷⁾は、学会の設立の要旨と経緯がよくわかり、高橋俊郎氏の「帝塚山文化圏という文学の土壌——帝塚山派の作家・詩人たち——」⁸⁾は、四期に分けて帝塚山派の作家・詩人たちの交流を描いている。本稿において、この『大阪春秋』の「帝

塚山モダンイズム特集」は大きな参考となった。

もうひとつ参考にしたのは、帝塚山学院創立一〇〇周年記念誌編纂委員会編集・執筆の『帝塚山学院一〇〇周年史』^⑨である。前述のようにA4判七七六頁に及ぶ大著であって、私も「第Ⅲ部戦後編」の執筆を担当した。

四 『ヴェルジエ』創刊

昭和二十二年十一月、帝塚山学院は季刊誌『ヴェルジエ』^⑩を創刊した。帝塚山学院の二学期は学校行事の多い時期で、特に昭和二十二年の十一月は、二日の体育祭に始まり、二十九日の文化祭、三十日の創立三〇周年記念式典と学院の行事が続いたが、教職員も児童・生徒も難なくこの諸行事をこなして無事終了した。

その中で、『帝塚山学院新聞』第六号（昭和二十二年（一九四七）十一月二日発行）の一隅に、季刊『ヴェルジエ』創刊号十一月二十九日発行の予定広告が載り、執筆者に藤澤桓夫・石濱恒夫・西垣脩・坪田讓治・小野十郎・佐澤波弦・石濱純太郎・江口乙矢・橋本多佳子・泉田行夫・岩崎次男・名和統一・伊東静雄の名が見える。関西の文化界を代表する顔触れである。この季刊誌に生徒の作品も載せられるのである。著名な執筆陣に交って生徒の作品を掲載、これが帝塚山学院の一つの特徴である。

しかし、発行間際まで困難は続いたようである。それは雑誌の名称の変遷からもうかがわれる。以下、『帝塚山学院新聞』に掲載された名称の変遷と『ヴェルジエ』の創刊号の内容を紹介しよう。

最初の発行広告は九月の『帝塚山学院新聞』（第五号、昭和二十二年九月二十四日発行）に載る。

三十年の伝統を誇る学院の歴史を顧み、文化革命の先陣としての使命を痛感する本誌編集部では、諸「兄弟待望の文化総合雑誌「学院季刊」を、清新な情熱を以て発行致します。どうぞ末長くご愛読を願います。

- 評 石浜純太郎 前芝確三
論 岩崎次男 橋本利一
詩 伊東静雄 小野十三郎

『学院季刊』 発刊

◎短歌 佐沢 波弦 ◎俳句 橋本多佳子

坪田讓治 藤沢桓夫

小説 石濱恒夫 庄野潤三 西垣脩

予約募集して居ります。定価二五円。新聞編集室までお申込下さい。(申込には代金不要)

帝塚山学院新聞編集室

とある。二度目の発行広告は十一月の『帝塚山学院新聞』(第六号、十一月二日発行)に、

(執筆者)

藤沢恒夫、石浜恒夫、西垣 脩

坪田讓治、小野十三郎、佐沢波弦

石浜純太郎、江口乙矢、橋本多佳子

VERGE

泉田行夫、岩崎次男、名和統一

伊東静雄

季刊『学院季刊』は季刊『べえるじえ』と改題

致しました 創刊号は十一月二十九日文

化祭を期して発売致します

予約募集中 定価二五円

とある。このように雑誌名は『学院季刊』から『べえるじえ』に変更し、さらに『ヴェルジエ』となって創刊された。『ヴェルジエ』の名称の由来については、創刊号の表紙裏に次のようにある。

ヴェルジエ（果樹園）

これは田園の新鮮な産物である。

我等は田園の風と光の中からつややかな

な果実や、青い蔬菜と一緒にこれらの

心象スケッチを世間に提供するもので

ある。

宮 沢 賢 治

この一文は宮沢賢治が童話集『注文の多い料理店』を出版するに際して書いた広告文の一節であった。それを『ヴェルジェ』刊行の趣旨に転用したのである。

創刊号の目次は次のようである。

表紙	……………	中村 眞
山茶花（作曲）	……………	川澄健一
会		竹村 一・坪田讓治
座		藤澤桓夫・水川清一
談		庄野貞一・学院小学部・女学部
新しい		女子自由大学教師生徒代表
時代を語る		熊澤安定
民衆と文化	……………	橋本利一
「家」の革命	……………	岩崎次男
「手」についての覚え書	……………	日野忠夫
孤独と誠実の人	……………	潮無良志
八角田堂	……………	

詩	とぎれた国道の人家	小野十三郎
	都会の慰め	伊東静雄
	躍動する女性の美	中澤米太郎
	踊る心	江口乙矢
俳句	峡 港	橋本多佳子
短歌	秋草の丘	佐澤波弦
童話の光影		坪田譲治
	秋田のわらべあそび	泉田行夫
	ラグビー雑感	坂口正二
秋窓放談		藤澤桓夫
	金色の輪	石濱恒夫
創作	BADOMINTON	庄野順三
	ETUDES	西垣 脩
	カット	桂 龍雄・石濱恒夫
	写真	同窓会カメラクラブ有志

新しい雑誌『ヴェルジエ』創刊号には注目すべき記事や作品が載る。そのひとつ「座談会 新しい時代を語る」に注目したい。児童や生徒（女学生）の写真と三行ほどの短文が三カ所にあって、

プロ編成も生徒、アナウンサーも生徒の校内放送、ゆくゆくは「施設学院放送局」として全国放送をする計画でいる。

編輯も経営も生徒でやっている学院新聞、自由の精神をくもらしてはならない。

「アソビ」は幼児の生活である。「子供の天国」は「少国民」の温床であってはならない。

などの発言が目目される。終戦直後において、このような夢の教育を実践しようとした庄野貞一を頂点とする帝塚山学院の教育方針をここに見ることができるといえる。

『ヴェルジエ』は昭和二十五年の第七号まで続いて廃刊となるが、その後も帝塚山学院の自由な思想に深く影響することになった。

五 『ヴェルジエ』の執筆者たち

このユニークな『ヴェルジエ』創刊号の執筆者たちをアイウエオ順に、帝塚山学院との関係を中心にして眺めたい。執筆者は先に見た『春泥集』の顔触れと重なる。

伊東静雄 明治三十九年生まれ。長崎県出身。京都大学卒。旧制住吉中学校・阿倍野高等学校教諭。「コギト」所属。日本浪漫派の代表詩人。昭和二十八年没。

泉田行夫 大正三年生まれ。秋田県出身。早稲田大学卒。帝塚山学院小学校教諭。児童劇団「ともだち劇場」主宰。後年、大阪芸術大学教授。平成七年没。

石濱恒夫 大正二年生まれ。大阪府出身。父は東洋史学者石濱純太郎。大阪高等学校より東京帝国大学に進み、卒業後、川端康成に弟子入り。作家・詩人。代表作『大阪詩情 住吉日記・ミナミ——わが街』。平成十六年没。

岩崎次男 治明三十八年生まれ。東京帝国大学美学美術史科卒。帝塚山学院高等学校教諭。のちに、帝塚山学院短期大学・帝塚山学院大学教授。昭和四十九年没。

潮無良志 西尾連のペンネーム。明治三十七年生まれ。大阪府、中河内の素封家の出身。旧姓久保田。皇學館大学卒。帝塚山学院小学校教諭。西尾家の養子となり、のち、帝塚山学院中学校長・高等学校長・副学院長を歴任。昭和六十三年没。

江口乙矢 明治四十四年生まれ。青森県出身。モダンダンス家。姫松に住み、帝塚山学院高等学校のダンス部を指導。昭和五十四年紫綬褒章受章。平成十六年没。

小野十三郎 明治三十六年生まれ。大阪府出身。旧制天王寺中学校を経て、東洋大学卒。詩人。大阪文学学校創設。帝塚山学院短期大学・帝塚山学院大学教授。平成八年没。

川澄健一 大正七年生まれ。滋賀県出身。帝塚山学院高等女学校教諭・帝塚山学院高等学校教諭。のち、神戸女学院大学教授。作曲家。校歌・市歌・社歌など作曲三〇〇曲以上。帝塚山学院の準校歌「祝歌（あかね雲）」の作詞は小野十三郎、作曲は川澄健一。平成二十七年没。

熊澤安定 大正九年生まれ。大阪府出身。東京大学経済学部卒。帝塚山学院高等学校教諭。のち、帝塚山学園の帝塚山大学教授・副学長。平成十二年没。

佐澤波弦 本名は儀平。明治二十一年生まれ。徳島県出身。小学校の教職の傍ら国語漢文科中等教員免許修得。府立富田林高等女学校ほか勤務。昭和五年、帝塚山学院高等女学校教諭。歌人。昭和七年J O B Kから短歌を朗詠し、佐澤節と称さる。昭和二十一年『あめつち』創刊。昭和五十八年没。

庄野貞一 明治二十年生まれ。徳島県出身。田中家の次男。徳島師範学校卒。庄野家の養子になり、山口県の萩中学校の英語教員時代に桃山中学校浅野勇校長の招きで桃山中学校の英語教員を約一年間つとめたあと、大正六年の帝塚山学院小学校開校時に校長に推挙されて着任。独自の教育理念で、「帝塚山教育」を樹立。初代学院長。戦後間もなく教育委員公選制がとられたときに立候補して当選。大阪府教育委員長をつとめる。帝塚山学院短期大学を開学した。昭和二十五年に没。

庄野英二¹⁾ 大正四年生まれ。山口県萩市出身。庄野貞一の次男。関西学院文学部哲学科卒。将校として中国・東南アジアに出征。ジャワ俘虜収容所副所長。昭和二十二年、帝塚山学院中学校教諭。以後、帝塚山学院高等学校教諭・帝塚山学院短期大学教授・帝塚山学院大学教授・帝塚山学院大学学長をつとめる。大阪市教育委員長。児童文学作家・エッセイスト。代表作『ロッテルダムの灯』『星の牧場』『アレン中佐のサイン』。平成五年没。なお、庄野英二は創刊号に執筆していないが、編集に関わっていたので、ここに挙げる。

庄野潤三 大正十年生まれ。大阪出身。庄野貞一の三男。旧制今宮中学校・大阪外国語学校を経て、九州帝国大学卒。朝日放送に就職したときに、帝塚山学院小学校同窓生の阪田寛夫と同じ課に配属された話は有名。旧制住吉中学校の伊東静雄に師事して作家を目指した。『プールサイド小景』で芥川賞受賞。代表作『夕べの雲』。日本芸術院会員。平成二十一年没。

坪田譲治 明治二十七年生まれ。岡山県出身。早稲田大学卒。児童文学雑誌『びわの実学校』を主宰。庄野英二に影響を与える。代表作『お化けの世界』『風の中の子供』『子供の四季』。日本芸術院会員。昭和五十七年没。西垣 脩 大正八年生まれ。帝塚山学院小学校から旧制住吉中学校へ進学したときに国語教諭伊東静雄から強い影響を受ける。東京帝国文学部卒。出征して復員後、しばらく帝塚山学院高等女学校で教鞭をとった。俳人。詩人。明治大学教授。昭和五十三年没。

橋本多佳子 明治三十二年生まれ。東京都出身。杉田久女に俳句を習う。昭和四年帝塚山に転居。山口誓子に師事。疎開で奈良市あやめ池に移り、永住。句集に『海燕』『命終』など。三女美代子も俳人。昭和三十八年没。

一日野忠夫 明治四十三年生まれ。京都市出身。京都大学文学部美学美術史科卒。帝塚山学院高等女学校教諭。のち、帝塚山学院短期大学・帝塚山学院大学教授。平成七年没。

藤澤桓夫 明治三十七年生まれ。大阪出身。著名な漢学者藤沢南岳の孫。石濱純太郎は母方の叔父。したがって、石濱恒夫とは従兄弟の關係。旧制今宮中学校・旧制大阪高等学校を経て、東京帝国大学文学部国文科卒。旧制高等学校の時代から新感覺派的な斬新な小説を発表。戦後、新築した自宅の書齋「西華山房」は、作家や文化人のサロンとなった。代表作『新雪』。将棋の腕前は日本棋院五段。平成元年没。

以上、一八人の執筆者のうち、泉田行夫は演劇人、特にラジオ放送の声優として活躍し、また、川澄健一は作曲家として著名であった。

このほか、明記しておきたい人物に、書道家の田中塊堂（本名英市）と日本舞踊家花柳有洸（本名塩満純子）がいる。塊堂は明治二十七年生まれ、岡山県矢掛出身。かな文字を得意とし、写経の研究にも功績を残した。昭和五十一年没。

有洸は大正十三年生まれ、大阪出身。帝塚山学院高等女学校・同短期大学卒。花柳流日本舞踊。「娘大黒」「円」「花ざかり」などの創作舞踊がある。長年、帝塚山学院の舞踊部の顧問をつとめた。昭和四十五年、大阪万博（日本万国博覧会）で「豊太閤と淀君」を踊り、翌昭和四十六年、四七歳の若さで没した¹²。

文学という範疇ではないが、舞踊家の江口乙矢・声優の泉田行夫や作曲家、文化人たちがこのように帝塚山派文学の周辺で活動していたのである。

六 帝塚山派文学への帝塚山学院の貢献

帝塚山派文学の起点はいつか。これは帝塚山派文学とは何かを論ずるのに重要な課題である。

先に挙げた『大阪春秋』の「帝塚山モダニズム」特集号所収の高橋俊郎氏「帝塚山文化圏という文学の土壌——帝塚山派の作家・詩人たち——」¹³⁾が、この課題に一つの指針を示すのではないかと私は考える。高橋氏は四期に分けて、帝塚山派の作家・詩人たちの交流を描いている。高橋氏のいう四期を簡単に述べると、

第一期 草創期 文化的土壌の育成⇨大正三年（一九一四）東成土地建物株式会社によつて帝塚山住宅地が開発され、帝塚山学院小学校が開校された時期（大正六年）。

第二期 開花期 咲き誇る文化人たち⇨大正十四年（一九二五）四月の大阪地域拡張により、帝塚山が東成郡住吉村から大阪市住吉区になり、石濱恒夫や庄野英二・潤三たちが帝塚山学院小学校を卒業した。

第三期 再耕期 終戦後の立て直し⇨昭和二十年（一九四五）日本が太平洋戦争に敗戦し、終戦直後の混乱の中で新しい文化活動が始まる。本稿で扱う『春泥集』や『ヴェルジェ』の創刊号はまさにこの第三期の前半期にあたる。

第四期 新芽期 新たな息吹き⇨昭和二十九年（一九五四）庄野潤三の『ブルサイド小景』が下期の第三二回芥川賞を受賞した。それまでも、昭和二十八年以降、いくつかの潤三の小説が芥川賞の候補に挙げられていた。高橋氏はこの第四期を帝塚山派文学の一つの到達点と見るようである。私もこの考えには賛成である。これのち、昭和四十九年（一九七四）に阪田寛夫の『土の器』が第七二回昭和四十九年後期芥川賞を受賞した。

私は庄野潤三・阪田寛夫の芥川賞受賞作品は、これまでの藤澤桓夫や石濱恒夫・長沖一の小説とは一皮も二皮も剥けて脱皮した作品だと思ふ。

たとえば、長沖の作品の背景には、帝塚山学院短期大学が盛んに顔を出す¹⁴。昭和二十九年（一九五四）、東京文芸社刊行の『やんちゃ娘行状記』の主人公は元陸上ヘルシンキオリンピック選手で、短期大学卒業後は新聞社に臨時勤務している。自宅は帝塚山である。

帝塚山学院短期大学はこの小説よりも四年前、昭和二十五年四月に開学した。初め文芸科と服飾科であったが、二年後、文芸科と家政科に改組された。その時の担当教授・講師の一覧表が『帝塚山学院四十年史』にあって、前出の高橋氏の「帝塚山文化圏という文学の土壌」にも掲載されている。重複するが、再度掲載する（次頁）。

一覧のように、長沖一は「創作鑑賞」「文芸研究」を、小野十三郎は「詩論」を担当している。その頃、父の会社の手助けをしていた杉山平一も「映画演劇論」を講義した。「言語学」を担当する石濱純太郎は中国語など東洋言語の権威であり、石濱恒夫の父、藤澤桓夫の叔父にあたる。このように帝塚山派の作家や詩人たちが帝塚山学院短期大学のいくつかの授業を担当していた。それは親しい者同士助け合いといった雰囲気であった。その中心というか、連絡係は庄野英二であったろう。

庄野英二の、英国の「桂冠詩人」をもじった『鶏冠詩人伝』¹⁵という作品に、次のような一文がある。

一九四八年（昭和二十三年）（中略）四月から帝塚山学院中学部に勤めることになった。¹⁶六・三・三・四制の新制度ができたばかりで教員が不足していた。私は男女五十人のクラス担任をしたが、教員が性に合っていたのか毎日が楽しくてならなかった。五十名の生徒中十三人の男子生徒がいて、私はまるでガキ大将であった。放課後、暗くなるまで生徒と野球をしたり、教室の窓の外で伝書鳩を飼ったりした。日曜日も男生徒が遊びに誘いに来た。

文中の伝書鳩は、運動場に面した教室の一角の窓枠を外して鳩小屋を作り、そこで飼育していた二羽のことである。更に教室に近い裏庭に山羊を飼い、教室の隅にハツカネズミを飼った。ハツカネズミは鼠算的に子供が産まれた。生徒の意見で大阪市立大学医学部に持参して、実験用に提供された。まさにガキ大将の英二が帝塚山学院の教授集めを助け、その帝塚山派の作家や詩人たちが短大教育の一翼を担っていたのである。

注

- (1) 帝塚山派文学学会事務局「帝塚山派文学学会設立記念講演会・設立総会開催報告」『大阪春秋』平成28新年号 特集「帝塚山モダンイズム——花咲いたモダン大阪の文化圏——」平成28・1
- (2) 高橋俊郎「帝塚山文化圏という文学の土壌——帝塚山派の作家・詩人たち——」『大阪春秋』平成28新年号（前掲）
- (3) 創立一〇〇周年記念誌編纂委員会『帝塚山学院一〇〇年史』平成28
- (4) 庄野英二『帝塚山風物誌』垂水書房 昭和40（『庄野英二全集』第九卷 偕成社 昭和54）
- (5) 高橋俊郎「帝塚山文化圏という文学の土壌」（前掲）に、長沖一も杉山平一も、庄野鷗一も英二も出征した。三男の潤三は（中略）海軍に入隊した。帝塚山学院出身の阪田寛夫も同様に学徒出陣をしていたから、彼らの文壇への登場は終戦を待たなければならなかった」とある。
- (6) 八木孝昌「帝塚山学院の創立と庄野貞一の教育理念」『大阪春秋』平成28新年号（前掲）
- (7) 帝塚山派文学学会事務局「帝塚山派文学学会設立記念講演会・設立総会開催報告」『大阪春秋』平成28新年号（前掲）
- (8) 高橋俊郎「帝塚山文化圏という文学の土壌」（前掲）
- (9) 帝塚山派文学学会事務局「帝塚山派文学学会設立記念講演会・設立総会開催報告」『大阪春秋』平成28新年号（前掲）
- (10) 『ヴェルジェ』創刊号 帝塚山学院 昭和22・11
- (11) 帝塚山学院関係者の庄野英二に関する論文に次のものがある。
佐貫新造「庄野英二全集を読んで」『こだはら』3 昭和55・3

杉山平一「庄野作品のユーモア」『こだはら』17 平成7・3

彭佳紅「庄野英二文学試論——『猫とモラエス』に見る詩情と愁」帝塚山学院大学日本文学研究35 平成16・2

「庄野英二が『抑留者』を書かねばならぬ理由——『木曜島』を『アレン中佐のサイン』の姉妹編として読む」

人間科学部研究年報16 平成26・2

鶴崎裕雄「熊野と庄野英二先生——一地域に見る文学の系譜——」『こだはら』30 平成20・3

(12) 塩間トシ『花柳有流』（私家本）

(13) 高橋俊郎「帝塚山文化圏という文学の土壌」（前掲）

(14) 鶴崎裕雄「長沖一先生と大阪・帝塚山——史料としての通俗小説の魅力——」『こだはら』37 平成27・3

(15) 庄野英二『鶏冠詩人伝』創元社 平成2

(16) 『帝塚山学院一〇〇年史』（前掲）の巻末「役職員一覧」に庄野英二の中学校教員着任は「昭和22・11」とある。昭和二十二年十一月から帝塚山学院に勤務し（事務局か）、翌昭和二十三年四月の新学年から教壇に立ったのであろう。